



2011/10/05

第 12 回 雨水対策の国際会議に論文発表

2011 年 9 月 11 日から 9 月 16 日にかけて、ブラジルのポルト・アレグレにおいて、第 12 回都市雨水排水国際会議（12th ICUD）が開催されました。

この会議は 3 年に 1 度開催されるもので、今回は、イギリス、ドイツ、オーストラリア、デンマーク、日本、フランス、オランダ、アメリカ等、雨水対策の先進国から、「雨水流出の水理」「浸水対策」「汚濁負荷の流出機構」「発生源対策」「気候変動」「雨水利用」等のテーマで約 360 編の発表がありました。日本からは行政機関、大学関係者、コンサルタント、メーカー等が参加しましたが、日本以外の国々からは女性の技術者、研究者による発表が非常に多くありました。

今回の会議でも、東京設計事務所では東京支社下水道チームの古屋敷直文が「二次元解析モデルを用いた都市型浸水対策」について発表しました。近年の雨水対策においては、従来の下水道管の中だけではなく、地表面の流れも併せて解析する二次元解析を用いることが有効とされています。この手法を実際の浸水対策計画に取り入れた実例を報告したところ、発表後の質問時間だけではなく、その後も個別に質問を受けるなど、多大な関心が寄せられました。

これは、市街化が進んだ国々で、計画を超えた集中豪雨（ゲリラ豪雨）による浸水被害が頻発していることが背景にあります。東京設計事務所ではこれまで、流出解析モデルを用いて浸水対策計画の策定を各地で行っており、そうした実績と技術の蓄積が国際的にも評価されたという手応えを感じました。

また、この 12thICUD では、降雨地点の移動、降雨量予測、降雨分布、そして雨水利用に関する発表がこれまで以上に多くありました。このような、近年の気候変動による深刻な浸水や濁水などの問題に対して、これからは新たな手法や技術で対応して行こうという世界的な傾向と、それに伴う多くの具体的な情報を得ることができました。